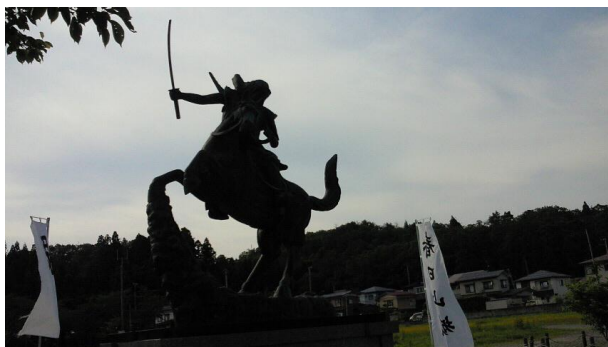


こだわりのひとり旅 (武将シリーズ その8)

「 謙信の関東管領就任 」

2016-7-22～25 遠藤俊一



謙
信
像

長岡駅から路線バスに乗って「栃尾中央公園」で降りた。
目指す栃尾城は目の前の栃尾山にある。
上杉謙信がまだ長尾景虎（かげとら）と名乗っていた時の最初のお城である。
諏訪神社の看板が見え、栃尾城址の碑が見える。胸がわくわくする。
その脇の階段を登ると境内になる。
まずはお参りと、正式に2礼2拍手1礼をする。
「景虎さん、来ましたよ」と胸の中でつぶやく。
境内で栃尾城址の案内図を見る。
本丸は山頂ではなく中腹よりちょっと上の方にあるようだ。
上り口を上がろうとすると看板が見えた。
なに！ 「キケン、クマ注意」とある、びっくりとする。
5月29日午後1時頃に、この上の「千人溜り」で、熊が出没した。鈴、ラジオなどを大きく鳴らし、十分注意するようにと書いてある。
どうしよう、今年は熊が多く里に出て、人を襲った記事が数多く新聞に出ている。
でも、今は他人事じゃないよ、どうしよう。まだ旅は始まったばかりだ。
しかも、今回の旅で栃尾城は箕輪城と並んでの目玉だよ。
景虎のところに行きたいし、熊は怖いしどうしよう。困ってしまった。
正に出鼻を挫かれてしまった。
何とか口実を見つけよう。今は7月22日だ。熊を見たというのは5月29日だ。2ヶ月前に1回だけではないか。もう大丈夫だよな、そうだよな、たぶんな。なんとも頼りない。
なんとか自分をだまくらかして恐々山道を登り始めた。
お気に入りのオレンジの肩掛けポシェットにはいつもの小鈴が付いている。
何か鳴りが悪い、そう感じる。小さな音でチリリン、チリリンと鳴る。
これじゃあ熊に聞こえないだろうが、もう～。

気になると熊のことばかりが意識にのぼる。
今年には熊に食べられた人が何人かいたな。
周りが気になって、気になって仕様が無い。
熊が出てきたらどうやって逃げよう。
あいつは前足が後ろ足より短いから下り坂が苦手だ。
出てきたらこの階段を走り降りよう。追ってこないだろう。
待てよ、下から出てきたら上に逃げるしかないか。
そうするとすぐに追いつかれるな。
もう、景虎どころではなくなってきた。
それでもずいぶんと登って来て、「馬場跡」という看板も通り過ぎた。
少し行くと、また出た、看板だ。
「キケン、熊出没」の真っ赤な文字が見える。



キケン
熊出没



馬場跡

よく読んでみると、この上の「千人溜り」で複数回、熊が目撃されています。
登るなら十分注意してください、とある。
目撃は1回だけじゃなかった。
もう本丸まではわずか500メートルの距離だ。
でも「千人溜り」を通らなければ行けないではないか。
さっきは2ヶ月前に見かけたと書いてあったが、今度は複数回も目撃されているんだよ。
もうだめ、やめだ、やめよう。
こんなにも新聞紙上で熊に襲われた人が報道され、こんなに看板でキケンを呼びかけられて、それでもあえて登って襲われたらみんなの笑いものだ。
会社にだって迷惑をかけてしまう。
もう、やめ、やめ。
Uターンして下山しよう。
ちょっぴり残念だが、間違いなくほっとしている自分がそこにいた。
しばらく下山道を降りているうちに無性におかしくなってきた。
ウ・フ・フ・フ・フ、思わず笑い出す。
「(景) 虎に会いに行ったのに、熊に追い返された」
おかしくてしょうがなかった。

今年のこだわりのひとり旅、テーマは「謙信の関東管領就任」に決めた。
信長、秀吉、家康をやり、政宗、元親、正成もやり、ライバルの信玄もとうにやっている。
もう、武将シリーズも8年目になる。これで謙信をやらなけりゃ申し訳がないではないか。
歴史好きの私にとっては、まあ、当然の落ち着き先だなこれは。

謙信に関するルートは二つ考えられた。一つは上洛ルートで、謙信が越中から越前を通り京に入った。数多の戦国武将が成し得なかった上洛を謙信がいとも簡単に行ったわけだが、私の旅としてはあまり変化を感じられない。

そこでもう一つが関東進出ルートである。上杉憲政から上杉姓と関東管領職を譲られた謙信が関東の北条征伐に向かう。春日山城を落ち、厩橋城（群馬・前橋）を落とし、そこを関東攻略の本拠とし、北条の本城、小田原城を囲み、攻め落とせなかったが、帰りに鎌倉の鶴岡八幡宮に寄り、関東管領就任式を執り行った。このルートだと景虎時代の栃尾城に寄れるし、特に行きたいと思っていた箕輪城は前橋近辺にある。また桜の名所として有名な高田城も春日山のそばだ。おまけに小田原城の側には秀吉が小田原攻めの時造った石垣山一夜城がある。私の城址コレクションにも数が多く加わるではないか。これに決めた。

7月22日（金） 第1日

8：10、小雨が降っている。雨での出発はこの旅には珍しい。
傘を差して、ザックを背負って、妻に旅立ちの写真を撮ってもらう。
例年と違って左顔を向けてみた。



傘をさして
いってきま～す

「センター北」から「新横浜」に出て、新幹線で「東京」へ。9：28「とき313号」は予定通りに11：13「長岡」に到着した。

切符の手配は今春から秘書になってくれた阿部さんがしてくれた。ただずいぶん苦勞したらしい。私はJR乗車券を「新横浜」～「高田」、新幹線特急券は「東京」～「長岡」を頼んだ。長岡で途中下車して栃尾に向かうつもりだった。通しで切符を買ったほうが安いと考えたのだ。ところが長岡で途中下車すると運賃が余計に掛かるという。「長岡」の手前が「宮内」だ。上越線で「直江津」方面で「高田」に行こうとするともう一度「長岡」から「宮内」を通って行くことになる。そこで「長岡」「宮内」間の料金が必要ということだ

った。阿部さんはこれを「登戸」駅や「新宿」駅の緑の窓口や電話で何回も確認してくれたそうだ。駅員でもその事情を知らない人がいて余分な手間をかけさせてしまった。悪いことをした。

長岡では東口のバスターミナルに向かったが、場所や時間には迷わなかった。実は4月にここには来ているのだ。

4月下旬に関係会社の東信システムハウスの柏崎技術センターを訪れた。久しぶりなのでセンターの従業員と懇親会を持つ方々視察してほしいと平田社長、森川取締役、安部取締役が案内してくれた。

長岡からはレンタカーで柏崎に向かった。そのほうが安い。長岡での昼食は名物「へぎそば」を食べたし、柏崎では魚料理で地元の人々と楽しく懇親の集いを行った。2次会で私がひいきにしている「フータン」の餃子を食べた。柏崎に来てこの店を素通りするスケジュールは私には考えられない。何しろ私は「東信ギョーザクラブ」の名誉会長なのだ。そして、フータンの餃子が日本で一番美味しい餃子だと思っている。

翌日は柏崎カントリークラブでゴルフをした。安部君はこれがデビュー戦だったそうだ。そして長岡に帰った。安いセットの切符を買ったので時間が余った。時間変更が効かないのだ。そこで私は夏に予定している「こだわりのひとり旅」の調査に当てようとの名案が浮かんだ。東口のバス営業所があってそこで栃尾行き時刻と停留場所を教えてもらった。私には名案だったが、同行している人たちがどう思ったか私には分らない。そして6月になった時、栃尾の観光案内所に電話して栃尾城に上るのはバス停「中央公園前」で降りるのが良いと教えてもらった。案内所の女性はとても感じよく話してくれた。

11:45 越後バス栃尾線に乗る。12:26 中央公園前で下車、城の方角を探す。たぶん目の前の小山がそれなのだろうと見当をつけて歩き出す。上り口を見つけたら歩き出す前に腹ごしらえをしなければならぬ。私のここでの目的は栃尾城に足を踏み入れることと、それともう一つ、栃尾名物の油揚げを食することだ。



栃尾の城山



栃尾城址図

橋を渡りその先のT時路を左折すると諏訪神社の看板が見えた。登り口は確保した、あとは油揚げだ。もう少し歩き、別の橋の袂を右折する。商店街らしい。いかにも田舎の商店らしく人通りはほとんど無い。軒を見上げると雁木だ。雁木通りと呼べそうに連なっている。趣がある。

うん、いいねとうなずいた。1軒、2軒とすし屋のような一般食堂のような店があった。戻るのは面倒なので2軒目の店に入る。

メニューを見る、あった、あった「あぶらげ焼き定食」というのがあった。

こちらの土地では油揚げのことを「あぶらげ」と呼ぶそうだ。

栃尾の大きく厚い油揚げをさっと焼いて上にねぎを乗せたとてもシンプルな料理だ。

これに味噌汁とライスがついて700円だった。

味はどうだって？ まあ、こんなものでしょう。

仕上げのお茶を飲み、一息つく。

私は栃尾に一度来ている。もう、30年近くなるのだろうか。

柏崎の新潟東信電気(株)に来ていた時のことだ。きっと例によって決算の手伝いをしに来ていたのだろう。客先の事業部長のお父さんが亡くなり、当夜、栃尾の実家で通夜が営まれるとの連絡が入った。新潟東信電気の田辺社長の運転で栃尾を訪れた。車を降りて坂を上ってご実家に行ったという記憶がある。あそこはどのあたりなのだろうか。今の私には見当も付かない。あの方には仕事上、群馬、府中、山梨、香港その他とてもお世話になった。今はどうされているのだろうか。

こうして腹ごしらえが終わり、栃尾の城に登り、虎に会いに行ったが、なんのことはない、熊に追い返されて帰ってくることになった。出鼻をくじかれた感もするが、後になってみると良い思い出になるかもしれない。何よりも話のネタになることは間違いない。

14:30のバスに乗り15:10には長岡に帰ってきた。

15:42ワンマンカーの2両編成に乗る。直江津で乗り換えて高田まで行くのだ。

ワンマンカーは田園風景と山里風景を見せてくれながら走る。

4, 50分も走ると「安田」「茨目」「柏崎」の駅看板が見えるようになる。

柏崎の新潟東信電気には何度通ったか、数え切れないほどだ。

「安田」を過ぎると右手の田んぼの向こうに「新潟東信電気」の看板が工場と共に見えていたものだ。

大学卓球部の後輩の山名が「遠藤さんの会社の看板を見ながら自分の会社に帰ったものです」とよく言っていた。

その看板も今は無く跡地らしき草むらが見えるだけだ。

「売地」と代わった看板が草に埋もれているのだろうか。

「柏崎」のホームの上には会社の案内看板があったが今は無い。遠い昔のことなのか。工場も「比角(ひすみ)工場」から始まり「礼拝(らいはい)工場」「西山工場」と代わり

ながら大きくなってゆき、「安田工場」で念願の自社工場にと発展した。社名も「新潟電子工業」から「新潟東信電気」となった。そして、日本経済の浮き沈みにともない29年の歴史を刻み、山梨東信電気と合併し社名も工場も今はなくなった。

立ち上げの時こんなことがあった。もう40年も前のことだ。

S51・11月が創立だったが当時は総理大臣の田中角栄さんの絶頂時だった。

当時の本社長（私の父である）のお供をして創立準備をしに柏崎に来た。

以後当初の定宿になった「昭和荘」に泊まった。

その夜、宿の親父と話しをする機会があった。

ここは角栄さんの地元だ。よいしょをして持ち上げていけば間違いはないだろうと角さんのことを褒めた。

すると、親父が言った。「遠藤さん、ここで商売をやろうとするならば、そんなに旗印をはっきりしてはいけないよ。少数だけどアンチ角栄派もいるんですよ。どっぷりと角栄さんに肩入れするのでないのなら、中立でいなけりゃ」

私はびっくりした。こんなに角栄さんの絶頂期でも、その地元でも、細心の注意をして商売をしている。私も心しなくては、良い教訓を得たと、ずしり心に響いた。

と同時に、そんな時期に、そんなアドバイスをしてくれた親父に感謝と親近感を覚えた。

そんな柏崎に東信グループとして現在唯一残っているのが東信システムハウスの柏崎技術センターだ。そのセンターも客先との関係から長岡に移すという。ビジネスは動いているものだからやむをえない。私もうなずかないわけにはいかない。これで柏崎から東信の形が無くなる。ちょっぴりおセンチになるではないか。

そうなる、これからは日本一美味しい餃子店「フータン」にいつ行けばいいのだろうか。これも気になるではないか。

電車は「柏崎」を発つと「鯨波」に停車した。ここで思い出した。

ある時、うとうと居眠りをして気がついたら電車が発車してしまったことがある。窓の外を見ると、迎えに来て改札口で私を探している田辺さんと井上の勇ちゃんの顔が見えた。

もう遅い。次の「鯨波」であわてて降りて、タクシーで飛んでいったことがあった。そんなことを懐かしく思い出した。私にだって失敗談もあるのだ。

だんだん夕暮れが近づいてきた頃「直江津」に着いた。ホームの反対側に電車が待っていた。高校生だろうか若い子が多くいる。2つ目の駅が「高田」だ。今日の宿泊地である。

駅前の道を真っ直ぐ歩く。3、4分で今日の宿「ラングウッド上越」を見つける。

ここでUターンして町並み探訪とする。繁華街らしきところをしばらく歩くと日本風料亭「宇喜世」を見つける。ガイドブックにも載っている懐石料理屋だ。雰囲気は良いが、一見でも入れるのだろうかという思いが横切った。

そこそこにしてホテルに戻り8、200円を払いチェックイン。荷物を部屋に下ろした。

シャワーを浴びてから一休み。フロントに下りて行き食事マップをもらう。お勧めの店を聞くと和食なら「軍ちゃん」が近くていいですよという。

「宇喜世」はどうかと聞くとあそこは予約しなくていいのかなとあまり勧めたがらない様子だった。

町に出てそぞろ歩き。「富寿司」の前でちょっと考えたが素通り、「宇喜世」の前まで来たが氣勢を削がれた感じで通り過ぎる。

結局、ホテルお勧めの鮮魚居酒屋「軍ちゃん」に入る。団体客が多くてうるさい。魚の味も、まあこんなもんかと早々に食べてホテルに戻った。すんなりと睡眠に入る。

かくて初日が終わる。

7月23日（土） 第2日

なかなか豪華な朝食バイキングに舌鼓を打った。

8：45 元気に高田の町歩きに出かける。

上杉氏が越後から会津に国替えになると、代わりに入った藩主は堀氏だった。

春日山では中央との交通の便があまりよくない。

そこで新たに作った城が高田城である。と、その時は思っていた。

現在では春の桜で有名だ。その城下町を歩いてみよう。

町会所のような「高田小町」から向かいの「高田世界館」に入る。

日本最古の映画館だという。通りから2、30メートルも入ると入口になる。

朝っぱらからはやっていない。若い人達が掃除をしていた。

恐る恐る「入って見学してもいいですか」というと「どうぞどうぞ」と愛想がいい。

昔の映画館だ。わたしが中学生や高校生の頃よく行った場末の映画館、あのエンジのピロイドの椅子が並んでいる。まだこんな映画館があったんだ。懐かしさに胸がワクワクした。

高田は雁木でも有名だ。このあたりは雁木通りでもある。上を見ると庇が出て人の通る道を覆っている。まあ、昨日見た栃尾の雁木通りが素朴で俺好みかなと思った。



高田世界館



雁木の通り

「小川未明生誕の地」でUターン。ホテルの横まで戻りそのまま真っ直ぐに歩く。

「雁木通りプラザ」から「旧陸軍（13）師団長官舎」に行く。明治風の洋館で趣がある。中に入り見学。びっくりしたのは第2代目長官がああ秋山好古だったことだ。

日露戦争時に明治軍隊の騎馬軍団を作った。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破った時の作戦参謀秋山真之のお兄さんだ。へえ、後に陸軍大将になっていたんだ。



旧師団長官舎



ゆかりの館屋
十邊舎一九

「時の鐘」はたいしたものでもなかった。「十邊舎一九ゆかりの館屋」で土産を買う。自分用に越後の笹飴を。これは漱石の「坊ちゃん」に出てくる乳母のキヨが勧めたのがここの笹飴だそう。文句無くこれを買った。孫娘達には干菓子の可愛らしいのを買った。帰宅して妻に見せたら私のは無いのと拗ねられてしまった。またUターンして堀端の「土塁」の脇を歩く。「対面所跡」の碑を見て、榊原家ゆかりの「榊神社」をお参りし、「高田城」に到着。実は後の調べでわかったが、この城は、大阪冬の陣の前に、徳川家康が六男忠輝の為に天下普請として築いた城郭であった。幟が立っていた。「蓮まつり」と読める。堀いっぱい蓮のピンクの花が咲いている。これは見事だ。東洋一というのもそうなのかと納得する。



蓮池



高田城三重櫓

城内に入る。高田城三重櫓の中に入る。出てきて記念写真を撮りたい。殿様とお姫様の看板で顔だけに穴が開いている。ここに自分の顔を入れて写真を撮ると言う例のやつだ。誰かにシャッターを押してもらおうと眺めたが、あいにく適当な人がいない。若い女性ならなおいいが、こういう時には都合よくはいかない。風采の上がないおじさんをお願いした。大分足が痛んできた。ホテルに預けた荷物を受け取り駅まで歩く。およそ3時間半の町歩きでした。

「高田」発12:54の電車で隣の「春日山」には12:58に着いた。駅周辺で食事をして、タクシーで春日山城に行こうと思っていた。ない！食堂も、タクシーもない。そんな雰囲気はまるで無い。どうしよう。目の前に「交流館」がある。あそこで聞いてみよう。

すると、同じ列車を降りたご夫婦らしき式服を着た二人が先に入って行った。やはりタクシーを捜していた。どうやら駅から数分で行ける結婚式場まで乗りたいらしい。そこに書いてあるタクシー会社に電話してくださいと言われていた。タクシーの乗り方は分った。後は食事だ。職員に聞いてみると。近辺には無い。駅向こうを少し歩くと回転すしがあると言われた。もう、そこに行くしかない。地下通路をくぐり階段を登り向こうに出る。駐車場らしきところの向こうにそれが見えた。

行ってみると「富寿司」と暖簾に書いてあった。昨日そぞろ歩きした時に見た店のチェーン店なのだろう。ようやく食事にあつける。「特選寿司」を頼む。(寿司10貫、天ぷら、茶碗蒸し、サラダ)で1500円だった。それにドリンクバーで飲み放題のコーラをお代わりする。

食後に先ほどの「交流館」で教えてもらっていたタクシー会社に電話してタクシーを呼んだ。15分位だろうか春日山の山道を登り上杉神社に付いた。土産屋の前であった。見覚えのある銅像が目の前の崖の上に立っていた。謙信像である。



春日山城の謙信像



春日山を望む

もうどのくらい前のことだったか、20年も前になるのだろうか、新潟東信電気の田辺さんと井上の勇ちゃんに連れてきてもらったことがある。

あれは夏、柏崎の祇園祭の時だ。呼び物の花火大会の特等席は会場である海岸のまん前にある旅館「岬館」である。この時期ここは相当前に手配しないと予約が取れない。半年前だとか、1年前とか言われている。それを取ってくれた。奥さんもご一緒にとということで妻も同伴した。

夫婦二人して宿の部屋から花火を見た。柏崎の花火は空に打ち上げるのではなく、一旦海に打ち込んでその反発で空に打ちあがるという珍しい打ち上げ方法を取っている。座卓に寄りかかりながら料理を食し、酒もちびりちびりとやりながら、大きなガラス窓の向こうの花火を見る。なんとも贅沢なものだった。

ただ何か物足りなかった。クーラーの効いた部屋は肌に気持ちよかった。見た目鮮やかな花火も視覚的には問題なかった。問題は聴覚である。花火の、あのドーンという音が小さいのだ。遠くに聞こえるのだ。窓が閉まっているからだ気づくに時間は掛からなかつ

た。花火はドーンと大きく聞こえて、そしてパーと色鮮やかにひらくから良いのだ。結局、二人して宿の外に出て、大勢の人込みの中に入って普通の花火鑑賞となった。

翌日連れて行ってもらったのが春日山城である。柏崎を訪れるようになってから暇を作り出しては近辺の「安田城」「枇杷島城」など上杉氏ゆかりの城跡にはこっそり行っていた。本城の春日山城はぜひとも行きたいところだった。その念願が叶い連れて来てもらった。その時もこの謙信像のある土産物屋前から上杉神社を通り、山頂の本丸跡へと4人で登っていったのだ。

今回の旅も帰ってから紀行文を書くことになっている。私はその冒頭の写真にこの謙信像を考えていた。ところが来てみて、いざ写真となってみると、遠いのだ、暗いのだ。像の建っている崖は3メートルはあるだろうか、そして木立の中で上手く画面に入らない。それに、午前中だったら逆光にはならなかったのだろうが今は午後だ。これはだめだろうなと思いながらケータイのシャッターを押した。いつもはバカチョンカメラを買って持っていたのだが、今回からはケータイのカメラにしている。やはり、帰ってから確かめたが使えないような画面だった。

タクシーの運転ちゃんに春日山城址碑の前でシャッターを押してもらった。どこかに荷物を預けるところはないかと尋ねると、ここの土産物屋が預かってくれますよという。店のおばさんに頼むと笑顔で引き受けてくれた。

「おいくらですか」

「いえいえ、帰りにお土産でも買っていただければ」

「じゃあ、そうしますね」

交渉成立である。

オレンジの肩掛けポシェットという身軽になって歩を進めた。



春日山城址碑



演武隊

50メートルほど先の神社の境内で人だかりがする。以前来た時のルートとは反対側から登ろうと考えていたが、私の野次馬根性がそれを許さなかった。境内では「演武隊」が演技をしていた。二人の男と一人の女だ。年配の男が上杉謙信役だった。一番前の床机台風の前席に座って、寸劇と踊りを30分くらい見た。終わりに上杉謙信が最後に勝どきを挙げたい、どなたか観客の人が音頭を取ってほしいと

呼びかけた。誰も出ない。謙信が呼びかける。まだ出ない。

「ほら、演技者が困っている、お前の出番じゃないか」 私の悪魔がささやいた。

「いやいや、いつも俺じゃないか、たまには他の人に譲ろうよ」 私の良心が答える。

「誰も出てこないよ、演技者は一生懸命やってるんだよ」

「うーん、しょうがないか、でも、もうちょっと待ってみようか」

「あっ、富山の薬売りのようなおっちゃんが指名された」

「めでたし、めでたし」

登ってゆくにつれて「直江屋敷跡」、「毘沙門堂」などに記憶が呼び戻される。毘沙門堂の前ではしばし瞑目する。謙信さん、また来ましたよ。今回は貴方が主役の旅です。関東管領就任の関東行きです。大分お待たせしましたが許してね。はるか下のほうに町が見える。ずいぶん登ってきた。やがて本丸跡に到着する。



春日山から



本丸跡

「景勝屋敷跡」、「三郎景虎屋敷跡」など前回は行かなかった所を遠回りして巡ってみた。テレビの大河ドラマ「直江兼続」の「御館（おたて）の乱」での主人公達には敬意を示さなくっちゃあ。

「ずいぶんごゆっくりだったのですね、どうしているのか気になっていたんですよ」土産物屋のおばちゃんが人懐っこそうに声をかけてきた。もう4時を過ぎていた。土産を買わなくてはいけない。昨日は孫娘達にお菓子を買ったから今日は孫息子達か。謙信、兼続の名入りのシャープペンシルと栗を買う。これでよしと。

タクシーを呼んで下山する。すぐに三叉路になり春日山駅のほうへと右折する。「なにっ、標識に何と書いてあった、右春日山駅で、左は林清寺だ。いけない、林清寺を忘れていた」

私は春日山城の後には、できたら林清寺と御館に行きたかったが、つい忘れていた。

「運転手さん、Uターンできない、林清寺に行きたいんだ」

「お客さん、無理ですね。ここは狭い山道なのでUターンは出来ません」

「しょうがないや、諦めるか」

「お客さん、でもちょっと遠回りだけど、下から麓回りで行けますよ」

「OK、それで行こう」

林清寺に向かう時、前方に「上越市埋蔵文化財センター」の看板が見えた。
あの剣舞隊はここ所属だったな。そうだと確認しておかなければいけないことがあった。
あの時、春日山城を日本5大山城の一つといていた。
残りはどこだ。館内で確認すると「月山富田城」(出雲)、「小谷城」(近江)、「観音寺城」(近江)、七尾城(能登)だった。
館外に謙信の銅像が建っていた。
「しめた、紀行文のトップ写真に使えるぞ」
「あっ、残念、逆光だ。でもなんとかかなるかな～、なってほしいな～」
それから林清寺にまわった。

上杉謙信は享禄(きょうろく)3年(1530)1月21日、春日山城で生まれる。
かくいう私と同じ誕生日なのだ。英雄はこういう寒く締まった季節に生まれるのだ。
この年が庚寅(かのえとら)に当たる所から、幼名を虎千代と名づけられた。
虎千代は越後の守護代長尾為景の4男であり、長兄の晴景とは18歳も若かったので家督を継ぐ見込みは薄かった。
天文5年(1536)父の為景は25歳の晴景に家督を譲り12月に世を去る。
この頃7歳の虎千代は戦力にならないので春日山の麓の林清寺に入れられた。林清寺の住持・天室光育が虎千代の薫育に当たる。
虎千代は幼児から精悍で肝太く知略に富んでいたといわれる。遊びにも城攻めを好んだといい、後の英雄の片鱗を早くも示していた。けれども林清寺での数年は幼い魂に深く影響し、彼の潔癖で世を厭い、ややもすれば隠遁を願う性癖はこの時培われたようだ。
父と違って自らが国内を鎮める力の乏しい晴景は林清寺にいる虎千代が14歳になるのを待ちかねたように春日山城に呼び戻した。そして元服させ、平三景虎(へいぞうかげとら)と名乗らせた。
景虎は古志・蒲原二郡にわたる中部の押さえとして栃尾城に入る。私が熊に追い返されたあの栃尾城である。16歳の時(1546)、ここで景虎は武将としてなみなみならぬ能力を見せ、反抗した周りの豪族を平定する。かくて一族家臣のあいだで景虎に対する期待の聲が高まり、兄晴景との確執に入ることになる。天文18年(1549)守護職上杉定実が調停に入り晴景が隠居して景虎が家督を継ぐことになり、この年12月の晦日に景虎は栃尾城から春日山城に移ることになった。19歳の時であった。

景虎が幼少の時をすごした林清寺に着いた。以前一度きているがその記憶は無い。
なかなか立派なお寺だった。景虎の性格に多大な影響を与えた林清寺だと思わずるのはあるが、それでもほんの少しの時間で一回りしてしまった。



林清寺



監物堀

「運転手さん、御館の乱の御館は近くにあるのかな」

「ええ近くですよ、あそこならむしろ直江津の駅に近いですね」

「わかった、そこへ行って」

「お客さん、途中に監物堀が有るけど寄りますか」

どうやら私を歴史好きのいいお得意さんだと分ったようだ。

「なにそれ、どういう堀なのよ」

「上杉氏の後に入った武将は堀秀治なんですが、その堀氏が一時いたところですよ」

「へえ～、そうか堀氏は高田城じゃないのか」

「そうですよ、それに高田城の前には福嶋城だったんですよ。これもそばにありますよ」

「えっ、そんな城があったの、そりゃあ聞き捨てならないな、そこも行くか。まずは監物堀だね」

「わかりました」

監物堀には数分で到着した。まあちょっとした原っぱみたいだが、ここで地元のイベントとして川中島の戦いを実演してみせる場所だという。山梨では笛吹川の河川敷で川中島の戦いを大勢の人が昔の軍勢よろしく演じて、信玄、謙信の一騎打ちを行う。あれのようなものなのだろうな。それでも今はポツンと母子連れだろうか草と戯れていた。

「さあ、運転手さん、御館跡に行って、それから福嶋城だね」

「お客さん、このへんは親鸞聖人が滞在したところでその居宅跡がありますよ。それに安寿と厨子王の碑もありますよ。寄っていきましょうか」

「わかった、わかった。どこへでも行くよ、連れてって。」

親鸞聖人邸といってもそこに案内板が無かったらよくわからなかつたろう。それに私はお坊さんにはあまり関心が無い。

御館跡は今では御館公園という町の中にある公園だった。小さな碑と案内板が往時を留めるばかりだ。謙信が無くなった後、その後継者争いで、姉の子景勝と、小田原北条氏康の子・三郎景虎とが戦った。景勝は春日山城に、景虎は御館に籠もった。戦いは景勝の勝利となり、景虎は逃げ行く先で切腹して果てる。私の中では有名な史跡なのだが、普通の人が訪れたなら、ただの町の公園なのだろうな。



御館公園



御館の図

「運転手さん、福嶋城に行きましょう」

「はいはい、それでも途中で安寿と厨子王の・・・」

「いいよ、いいよ、そこも寄ってゆこう」

そうか、森鷗外の「山椒大夫」で安寿と厨子王が売られて佐渡島に船出するのはこの浜からだったのか、今初めて知ったな。

橋の欄干にそのレリーフがあった。

逆光で上手く写真が撮れないとつぶやくと、向かい側にもレリーフがあるからそれを撮れと言う。車を気にしながら横断しようやくシャッターを押した。別にどうでもいいのだが、運ちゃんはそので気が済んだようだ。

福嶋城は、今は中学校だったか高校だったか、その校庭に碑が建っていた。プレハブがあり保存会の仮事務所とあった。案内板には「上越の三名城」として、春日山城、高田城、そして福嶋城と見取り図付きで書いてあった。水城である。後で調べてみると、堀秀治の子忠秀が春日山城を廃城し、福嶋城を築いた。



福嶋城
古城の図



越後・上越三城

私は福嶋城をここに来て初めて知った。上杉氏の後が堀氏で、春日山城を廃止したのは知っていた。しかし居城が高田城で無く福嶋城だったとは知らなかった。しかも地元では三名城として名まで売ろうとしている。こういうことが自分で実際に現地に行くとわかることだ。私の鼻が自慢げにびくびくした。おまけに私のお城コレクションに195番目が加えられた。

ちょうど一昨年に「正成の太平記」で天王山に登り、ここを秀吉が大阪城を築く前に居城とした山崎城だと知ったのと同じだ。またまた得をした。

「さあ、運転手さん、直江津の駅に帰りましょう」

「お客さん、義経が立ち寄ったというお寺が近くにありますが。かぶと池がありますよ」

「わかった、わかった、どこへでも連れてって」

まあ、なんの変哲も無い場所で水場がちょこっとあっただけだ。

「義経がこれを飲んだんだかね」

運転手は何も答えなかった。

「お客さん、これで全部です、直江津駅に行きますよ。すぐそばですから。」

「うん、ありがとう」

いい運転手さんに当たったようだな。

直江津からは昨日と同じで「えちごトキめき鉄道」の「妙高はねうまライン」に乗った。

17:39発だった。

一つ目が「春日山」だ。ホームからの乗客を何気なく眺めていたら、黒い式服を着ている夫婦連れに目がいった。

あっ、昼に同じ駅で降りて前にいたご夫婦だ。また会った。こういうのは珍しいな。

何もすることが無かったので、こういうことを感じて何か嬉しくなった。

「高田」を過ぎてまもなく17:54に四つ目の駅「上越妙高」に到着した。

ここで北陸新幹線に乗り換えて、今日は高崎まで行く予定だ。

ここで事件が起きた。

連絡橋を上り下りしていたら男の人が小走りに急いでいた。

私はもう今日の予定は無い。ゆっくり歩いているうちに考えが巡った。

これから高崎に行って箕輪城と前橋城を見て、それから小田原に行く。乗車券は通しで小田原まで買って、特急券だけは高崎までを買うといいな。別々に買うより少しは安くなるだろう。それだと自動券売機より緑の窓口がいいな。

窓口には先客がいた。何か手こずっているのか時間がたってゆく。何気なく時刻表を見ると次の新幹線は数分後になっている。その次は1時間15分もある。

そうか、ここは新横浜じゃないな。列車がいくつもあるのじゃないな。

とたんにさっきの小走りの男の人を思い出す。

いけない、列を離れ、自動券売機コーナーで高崎まで乗車券ともども特急券を買う。

脱兎のごとくといいたいが、重いザックを背負って、ゼーゼー言いながら、階段を走って登り、ホームへ。そこには17:57発、新幹線の姿は跡形も無かった。

がっかりして、一旦改札口を出る。目の前の駅中の一つしかない居酒屋風の喫茶コーナーに入る。口に入れた生ビールはほろ苦かった。

するとすぐ後に二人連れが私の隣の席に腰を下ろした。例の式服を着たご夫婦だ。

また会った、ここいうのも珍しいな、なんかの縁だなど思うと思わず口に出た。

「またお会いしましたね」

「えっ」

「お昼に交流館にいらっしやいましたよね、私もいたんです。そして先ほど春日山駅で乗られましたよね。またお会いしたなと思っていましたらここでもご一緒です。おもわず声かけてしまいました」

「そうでしたか、奇遇ですね」

「私、ぐずぐずして新幹線に乗り遅れてしまいました」

「私達もそうなんですよ、乗り継ぎ時間がなさ過ぎますね」（3分しかなかった）

「どちらまでですか」

「埼玉のほうなんです」

「そうですか、私は横浜ですけど今日は高崎泊まりです」

「もう一生お会いすることも無いでしょうが、こうして一緒にお話しているのも何かの縁なんでしょうね」

「そうですね、良い旅をお続けください」

「はい、ありがとうございます」

19：13発の新幹線に乗って、社内でりんごアイスを食べて、無事20：25高崎駅に着いた。越後（えちご）から関東の上野（こうづけ）に出たことになる。

長尾景虎も永禄3年（1560）動員令を発して越後衆8000の大軍を率い、8月に三国峠を越えて関東平野に出陣した。越後からまず上野へと進出したわけだ。

景虎は義の武将といわれる。自らは他国を侵略せず、他者からの請いを受けて支援の軍を送る。戦国時代には稀なというより唯一の義により戦を行った武将であろう。

景虎が越後の国主になって2年目、天文19年（1550）信濃守護小笠原長時が甲斐の武田信玄に追われ景虎を頼って越後に逃れてきた。さらに北信濃の村上義清も信玄に敗れ越後に落ちていった（天文22年1553）。ここに景虎・信玄の両雄が直接対決を余儀なくされる川中島の戦いが準備されていった。

一方、関東平野にも大きな変化が起きていた。小田原の北条氏康は古河公方足利晴氏、関東管領上杉憲政らを破り武蔵の大半を制し、関東の多くを掌握していた。

そして、天文21年（1552）、関東管領上杉憲政は氏康に追われ、平井城を捨て、三国峠を越えて、越後の若き領主長尾景虎に救援を求めてきた。

これにより景虎は信濃の信玄と関東の氏康と二方面に強力な敵をひきつける結果を招いた。結果的には信玄との川中島の対決は5回、関東へは10数回の出兵をしている。

だがこの時23歳の景虎はどんな敵も恐れず、南の敵も西の敵もいつか撃破して広い天地に羽ばたく事を夢見ていただろう。

永禄2年（1559）、景虎は5000の兵を率いて上洛している。将軍足利義輝に謁し、

上杉憲政から私的に譲られていた関東管領職を公認してもらうのが目的だった。金銀財宝を幕府・朝廷に献上し、関白近衛前嗣を関東公方に迎える約束を取り付けた。実質をとまわらない関東管領や関東公方に無駄な時間と財力を使ったように見えるが、彼なりに行動の一貫性と筋目を正す行為であったのだろう。こうして永禄3年の関東進出であった。

私の上野（こうづけ）での宿は駅前の「アパホテル高崎駅前店」であった。朝食付きで10,100円、何度かは泊まっているアパホテルグループだ。夕食は駅前一通り歩いたが、結局ホテルの「銀ゆば」にした。湯葉に惹かれたからだ。「日替わり御膳」、ほっけの一夜干、小鉢2で1500円。それに「とろ湯葉と生麩の刺身」800円と「浅漬け生湯葉巻き」680円を追加注文した。足の張りを少々感じたが、生ビールでのどを潤しながらほっけを食べ、湯葉に舌鼓を打って、それから関東での眠りに付いた。

7月24日（日） 第3日

高崎駅発9:00のバスに乗った。

今回の旅で一番楽しみにしていた城址である箕輪城を訪ねるのだ。196番目の城になる。当時この地を支配していた長野氏が甲斐の武田信玄や小田原の北条氏康の侵攻に耐えていた本拠として歴史に良く出てくる。だから、謙信が北条攻めで関東に進出してくると真っ先にその陣営に加わったのも当然だ。

箕輪城へどう行くのか事前に調べた。高崎市の観光課に電話すると箕郷（みさと）支所に回してくれた。地域振興課教育担当係長の小林礼子さんがそれはそれは丁寧に対応してくれた。バスの時刻から城址への行き方、そして地図を3枚もファックスしてくれた。おもわず目をつぶってどんな方なのかなと想像もしてみた。ルンルン気分になった。

9:35迷わず箕郷本町のバス停で降りて歩き出した。少し上り坂になっている。小林さんにいただいた地図には「矢原宿町並み」と書いてある。「信長」の時の熊川宿や、「家康」の時の関宿のように本格的な宿場町とは整備されていないが、ちらほらとそれらしきは見受けられる。



矢原宿
通り



法峯寺

法峯寺前を左に回りこめと教わったが、どうせならお寺にお参りしてゆこうと直進した。お寺は普通であったが、そばに城で使ったといわれる古井戸があった。いよいよ箕輪城だと気分が高まってきた。

道を左に回りこんで行くと、もう右手にはこんもりとした森が見えている。箕輪城址である。箕輪城長寿センターを過ぎると虎韜門（ことうもん）入口という看板が見えた。木立が切り払われて木の階段が広く設置されていた。



箕輪の城へ



虎韜口からの登り

箕郷支所の小林さんが言われていた通り、この箕輪城の遺構を整備中なのだろう。市としても観光資源としてお城を売り出したいのだろう。

登ると堀切が見えた。すぐに二の丸、本丸への道を行かず、右に回りこんで搦め手口に一旦出た。そして二の丸に入っていった。

ベンチに何か私に物言いたげなおじさんがいた。しばらく無視していたが、しょうがない、ちょっと近づいてあげようかと寄っていった。

ボランティアの地元ガイドの方だった。箕輪城のパンフレットをくれた。私が得意げに今回の旅のテーマを話したが、この城は直接的にはあまり謙信に関係が無いのだろうか話に乗ってこなかった。

それでもこのパンフレットはファックスでもらった地図よりも詳しいので役に立った。隣の本丸に入っていった。箕輪城跡と書かれた碑が建っていた。ケータイのカメラでパチリとやった。さらにその奥の「御前曲輪」「稻荷曲輪」と進みUターンして反対側の「蔵屋敷」「三の丸」を通り「二ノ丸」に戻ってきた。



空堀跡



本丸跡

そしてもう一度本丸に行きたいのだが、その前にやることがある。

あの碑の前で私を写してもらう人を探すことだ。

先ほどからちらりほらりと人が見える。景色を見るでなく何か手に持ったものを見ながら歩いている。何人も見た。

ははんと思った。昨日ホテルのテレビで見たニュースで、ポケモンゴロの爆発的な売れ行きと各地各地に繰り出す愛好者の群れを紹介していた。あれがそうなんだなと感じた。女性の二人連れが私の前を通り本丸のほうに向かった。しばらく考えてからその後についていった。ストーカーに間違えられないように背筋を伸ばして胸を張って歩いた。母娘だった。無事、石碑と私をとってもらった。そして会話が始まった。私の城好きを知ってお母さんが訪ねた。

「この城はどうなんですか」

「いいと思います。建物は無いけど堀のあとがはっきりしています。それぞれの曲輪が堀で分けられ連携しているのが見受けられます。いかにも戦闘用に作られた城という感じが出ていて私には強く印象に残るお城になりました。評判の高い鉢形城よりいいですよ」

「そうですか、地元ですがよくわかりませんでした」と私の言葉ににっこりと笑った。



箕輪城跡碑の前で満悦

バス停に戻り12:15発、高崎駅には12:50に着いた。JR両毛線13:08発、前橋には13:22着だった。まずは腹ごしらえだ。駅前を探すけど飲食店はほとんど無い。秘書の阿部さんが「駅前には本当に何にも無いですよ」と言っていた。以前わが社卓球部の全国実業団大会出場で彼女達とここへ来たことがあるのだがそれを改めて実感する。回りまわって駅近くの居酒屋が昼食もやっているという風情の店で「日替わり定食（鮪のソテー）」780円を注文する。お腹が満たされて私のいらいらも落ち着いた。

駅から歩いて15~20分くらいだろうかと群馬県庁に着いた。地上33階建ての堂々たる建物だ。



群馬県庁
(現代のお城)

旧厩橋城本丸跡に建つ

ここが前橋城の本丸跡である。景虎の時代は厩橋城（うまやばしじょう）と呼ばれていた。32階の展望ホールにはだれでも無料で上がれる。31階には展望レストランがあり、懐石料理が食べられる。しまった！昼食はここにすればよかった。後の祭りというものだ。展望ホールでは利根川を見下ろし、雄大な関東平野が見渡せる絶景である。関東に進出した景虎はここで北条征伐の構想を練ったことだろう。

関東に侵入した越後軍は瞬く間に明間、岩下、沼田など北条の属城を席卷し、上野の重要拠点の厩橋城を陥れて、そこを前線基地とした。景虎は本丸に上杉憲政を奉じ、関東各地の諸将に檄を飛ばし関東管領の失地回復の義戦に協力するように要求した。上杉憲政にとっては北条氏康に追われて以来7年目の関東帰還であった。

軍団は日増しに膨れ上がり、永禄4年、厩橋で越年した景虎は3月に入ると行動を開始した。進軍を開始した景虎のもとに集まる軍勢は膨れ上がる一方で、従わぬものは一気に蹂躪し景虎軍は長駆して相模に殺到、北条の本拠小田原を包囲することになる。

北条ははじめ河越城で景虎軍を迎え撃とうと考えたが、関東の諸将がこぞって景虎軍に帰属するのを見て小田原籠城戦に切り替えたのである。

こうして景虎は厩橋城から小田原に向かった。

展望台から降りた私は前橋城碑と前橋城土塁を見、利根川べりを少し歩いた。やけに人と車が多い。気になって歩いている人に聞くと、近くで地元出身の3人組のコンサートが開かれているらしい。



前橋城跡



前橋城土塁

タクシーに乗って駅まで戻った。もう足が歩くのを拒否していたし、この前橋城跡はあの実業団卓球大会の時、選手が練習している間に、一人でちょこっと訪れていたところだ。あまり時間をかけないでよいところだった。

高崎16:15発、東京着17:12。東海道新幹線に乗り換えて17:28発、小田原には18:01に到着した。

小田原での宿舎は「ホテル・クニミ小田原」である。私が「富士小山ゴルフクラブ」でゴルフのプレーをする時、前日に泊まる定宿「ホテル・クニミ御殿場」のチェーン店になる。駅から5分と地図には書いてあったが、なにか方向感覚がピタッと来なかった。

勘を働かせて左回りにぐるっと一回りしてしまった。自分の勘を信じなかったらあと50メートルでホテルにつけたものを。

6500円の宿泊費を払い、ザックを部屋に置いてフロントに下りていった。

「料理茶屋 小伊勢屋」はどこかと聞いた。今夜の食事処と考えていた。

フロントでは探すのに苦労していたが、ようやく見当をつけたらしく、前の道を真直ぐ行き、小田原城を通り越して国道にぶつかったら左折、右側にあるはずと教えてくれた。

小田原城はすぐそばにあり、堀端を歩いて国道にぶつかる。信号を渡り左折して右側を見ながら歩く。ない、それらしき看板は見えない。ずっと先まで歩く。もう確実に通り越しているのだろう。ひょっとしてこの辺に「高橋旅館」があったのかもしれない。

私が「小伊勢屋」にこだわった訳はこうだ。

もう52年も前になる。大学1年の春休みだ。卓球部の合宿が小田原であった。体育館は城内で、宿舎が分宿となり一方が「高橋旅館」片方が「小伊勢屋」であった。私は「高橋旅館」組だった。自由時間を宿舎で同期の男達とだべっていた。そこに「小伊勢屋」組だった同期の女の子が数人来ておしゃべりをした。その内の一人が黄色いセーターを着ていた。彼女達が帰った後で私の脇には黄色いセーターがちらちらと消えずにず～と残った。純情だった思春期の思い出である。

5年ほど前であろうか、卓球部のOBで「歴史散策の会」として小田原を歩いた。その時に小田原在住の先輩が小伊勢屋に案内してくれた。高橋旅館はもうなくて、小伊勢屋も旅館部門はなくて料理屋専門になっていた。そのことがあったので、今回のひとり旅では夕食を小伊勢屋でとり、黄色いセーターの想いに浸ろうと思った訳だ。

結局見つからなかった。次の日に乗ったタクシーの運転ちゃんとの話でわかったことだが、小伊勢屋のビルは今建て直し中でマンションになるとか、思い出は遠く去ってゆく。

もう、かなり暗くなった道をぶらぶらと帰りホテル前を素通りして駅のほうに向かった。足もいうことを聞かないし、店は和食ならどこでもいいや。近くにあった「相模茶寮・いずみ」という地下の店に入った。

小奇麗で感じのよい店だった。カウンターに座り2500円の「煮魚御膳（金目鯛の煮付け）」を頼み、鰻のなめろう800円と鮎の一夜干し700円を追加した。カウンターの向こうの板前さんは溝口さんといい小田原に来てまだ新しいという。口数は多くは無いが受け答えに感じの良さが目立った。お運びのお姉さんは栗原恭子さんといい、年配ですこぶる私と話が合い、気もあつた。私の城話や恭子さんの地元話など話に花開いた。気がつくと他のお客さんは誰もいなかった。他のお運びさんをみると、どうやら箸を逆さに立てたがっているようだ。

どれ、ホテルに帰るとするか。かくて、小田原の夜は更けていきました。

7月25日（月） 第4日

最終日だ。8：49、ザックをホテルに預け、お気に入りのオレンジの肩掛けポシェットを背負う。小田原城はすぐそばにある。正面の馬出門口は歴史散策の時通っているのに、手前の学橋（まなびばし）を渡り二の丸広場に出る。今は広がっているがもう50年も前になるが、ここに体育館があって、大学の卓球部の春の合宿は4年間ここで行った。



学橋から入城



二の丸広場

4年生最後の合宿の時だ。この広場で縄跳びマラソンを行った。縄跳びのその場跳びをどのくらい続けられるかの競争だ。私は当時縄跳びのその場跳びを5分もすると頭が痛くなって弱ったものだ。ところがこの競争では30分もたったころ50人ほどが6人に絞られていた。なんと、私がその6人に入っていた。後で聞いたが、他の5人はみなきつくなると私の姿を見て元気付けていたと言う。今正に、縄に足を引っ掛けるような疲れが見え見えだったようだ。そこで力尽きたが私の鼻は高くなった。結局、最後の二人は決着がつかないので、これから二重跳びにしますよとリーダーが言ったとたん一人がミスをした。優勝したのは2年の大久保だった。私は朝のマラソンにも、昼の練習にも、夜のゼミ研修にも、最後の合宿だと力を入れた。最終日に合宿で特にならばと特別賞をもらった。こんなことなど懐かしく思い出した。

天守閣に登ってみる。謙信時代の天守は少し離れたところにあったようだが、小田原城の難攻不落は天守だけでなく町全体を囲んだ総構えにあるという。謙信も、後の信玄も攻め落とせなかった。

景虎の小田原包囲軍は10万余に達したという。しかし、大軍に包囲されたものの北条軍の抵抗はしぶとく一ヶ月たっても景虎は小田原城を落とせなかった。堅城の攻略は攻めるほうが犠牲者は多く出る。攻めても攻めても城は落ちない。景虎は小田原攻略をあきらめて鎌倉に引き上げた。補給の問題や武田との信濃国境問題もありいつまでも小田原にとどまてはられなかった。さらに、景虎が鎌倉に引き上げたのは、鎌倉八幡宮に諸将を集め、関東管領の就任式を行うためでもあった。かくて景虎は小田原から鎌倉に向かった。

小田原の天守閣に登った私は西のほうを見やった。案内板には石垣山一夜城が箱根山の手前にあった。私は鎌倉に向かう前に石垣山一夜城に行くのだ。後の世に、秀吉は謙信も

信玄も落とせなかった小田原城攻略を、石垣山に一夜城を築き長期戦を持って落とすことになる。



小田原城天守



遠く箱根をバックに
一夜城を望む

11:30一旦ホテルに戻り、タクシーに乗って石垣山に向かった。車内で運ちゃんに小伊勢屋の建て直しのことも聞いた。15分位であろうか石垣山は以外に近いと思った。

上り口から入るとすぐに本丸跡に着く。小田原の町が見渡せたが、小田原城がどこかはわからなかった。たぶん、あの緑の密集しているあたりだろうと慰めた。

それでも満足感がある。今度の旅で新たな城を踏破した。栃尾城、高田城、福嶋城、箕輪城、石垣山一夜城である。これで197の城に行った事になる。いよいよ200が目の前だ。おそらく次の機会がそれになるだろう。このことにワクワク感が湧き上がってきた。



一夜城登り口



石垣山史跡

元の駐車場に戻りタクシーを呼ぶためケータイを取り出した。圏外の表示が出る。あせってしまった。こんなところで放り出されては困る。あちこち歩きケータイを見る。圏外の表示だ。それでも、しつこく歩き回ったら、ようやく通話できる場所を見つけた。一安心だ。13:00、ホテルでザックを受け取り歩き出す。

昼食が問題だった。昨日、私はホテル前のウナギ屋に目をつけていた。行ってみると、もう売り切れで店じまいですという。ならばとやはり昨日2番候補にしていた蕎麦屋に行く。行列だ、待ってられない。仕方なく駅のほうに歩く。

見覚えのある店に看板が出ていた。

「秘伝のたれ、天井御膳：1200円」

足は慣れた階段を下りていった。昨夜の店「相模茶寮いずみ」である。

カウンターに座ると、板さんの溝口さんが

「いらっしゃい、昨夜はどうも、恭子さんいますよ」とにこにこして声をかけてくれた。天井御膳を注文して待っていると、

「昨日はありがとうございました。面白い話を聞かせていただいて」と恭子さんが向こうの部屋からわざわざやって来て笑顔を見せてくれた。

二日連ちゃんでお店に行くところこういうふれあいがあるいいものだ。

「秀吉」の時の岡山小料理屋のおばちゃん、「信長」の時の敦賀おでん屋の親父、そして今回「謙信」での恭子さん、溝口さん。人間のふれあいの深さは数の多さに比例するものだ。まして他国の町の飲み屋さんではなおさらだ。

小田原を13:53発、大船で乗り換えて、14:45鎌倉に着いた。

火曜日だけど人通りはかなりある。

駅前からしばらく歩き段葛（だんかずら）に出る。



鎌倉駅



段葛（だんかずら）

段葛はいわば鶴岡八幡宮の参道だ。近年改修され、拡幅（事実と同幅だった）、舗装もされ立派過ぎてしまった。私が学生の頃は道も狭く感じ、土も見えて風情があったと思う。また、あの頃を思い出す。

八幡宮に近づくと右手に「さくら」という軽食堂があり、我々はそれをあっちゃんの店と呼んでいた。卓球部の合宿の時はここで朝食、夕食を取った。当時小学校5年生のあっちゃんは、それはそれは美少女でみんなの人気者だった。

少し先の左手にあった土産物屋兼食堂ではスープライスで腹を満たしたものだ。スープに野菜が沢山入っていてご飯と共に食べるのだ。今は二軒ともなくなってしまった。

私の母校の横浜国立大学は、学芸学部が八幡宮の隣にあり、卓球台が6台置ける卓球場があった。月に一度くらいはここで全員の合同練習が行われた。春と夏はレギュラー合宿が一週間行われる。私は7回参加している。2年生になって半年間、毎週土曜日には鎌倉に通い、レギュラーを目指して同期の椎名と「玉子パンの思い出」と名づけた二人の練習を夜遅くまでやった。鎌倉は通いなれた、そして青春の思い出の地でもある。

八幡宮に着いた。源平の池を左右に見て、階段を登る。源実朝暗殺で有名な大銀杏もまだ養成中だ。確か落雷でやられた（後に強風でと知る）のだ。拝殿してこの旅の締めくくりかと振り向いて鎌倉の町を見下ろす。何度も見ている景色だが。

近年もここにはたびたび来ている。お宮参り、七五三だ。娘の旦那の実家がここに近く、孫達の記念日にはいつもここに宮参りしている。

それでも、私が今見ている鎌倉の町を、謙信も見ていたのだろうと思うと、今回はちょっとばかり心持が違っていた。



鎌倉
鶴岡八幡宮



小田原から鎌倉に向かった景虎は、ここ鶴岡八幡宮で諸将を引き連れ関東管領の就任式を行った。景虎は己が関東の統治者になったことを諸将に宣明した。この就任式には上杉憲政も参列し、正式に管領職を譲り、景虎は憲政の一字を貰い、上杉政虎と名乗ることにした。謙信と称するのは9年後の元亀元年（1570）のことである。

謙信の関東管領就任は謙信自身が意識したほどの画期的な出来事ではなかった。京都の將軍職ですら有名無実で実力者の道具に成り下がっていた時代である。しかし、二度の上洛で、天皇、將軍より領国鎮撫の任を託された律義者の謙信にとって関東管領就任式は一世一代の晴れ姿だった。

確かに後年、小田原を攻めあぐねた信玄が撤退した時には、北条軍は追撃戦を行っている。三増峠の戦いである。ところが、謙信の時は追跡どころか、近くの鎌倉八幡宮で就任式を悠長に行っているのに何も出来なかった。それだけ謙信の勢いが強かったのだろう。

小田原攻略の大遠征と鎌倉での管領就任式を終えて越後に帰国した謙信は、息つくまもなく動員令を発して信玄との対決に備えた。そうして行われたのが、8月から9月にかけての川中島の大合戦であった。

以上が私の辿った、謙信の関東管領就任である。

鎌倉鶴岡八幡宮での参拝で私の今年のひとり旅は完結のはずではあった。

ところが私にはもう一箇所行きたいところがあった。
横浜国立大学旧学芸学部の卓球場跡である。

今年のひとり旅は、謙信を追うというより、自分の思い出を追っている旅という要素が強かった。であるならば、私の青春の象徴「卓球」の地を締めくくりとしたい。

15:20、八幡宮の横からの道を辿った。
すぐに、通用門だろうか看板が見えた。

「横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校」、何と20文字である。それも上が小学校下には中学校が書いてある。これはギネスものだね。

少し歩いて、そのとなりが、当時の学芸学部だった。
今はその面影は全くない。
門の向こうには広々としたグラウンドと緑の丘陵が望めた。
かつてはここに寮と奥に卓球台6台の小体育館があったのだ。
寮に泊まっただけの合宿とあの「玉子パンの思い出」練習が懐かしく思い出される。
そうだ、3年生の時、卓球に負けてその日のうちに、床屋さんで頭を丸坊主にしたっけな。
何か懐かしく思い出される。



二十文字の校名



グラウンド

グラウンドに入ってケータイをパチリ、さらに内に入ってゆく。
お子さんとお母さんらしき人がグラウンドの砂で遊んでいる。
私が近づくとお母さんが顔を上げて
「あの、ここは部外者が入ってはいけないのですよ。許可証をお持ちですか」
「いや、あの・・・」
訝しげな表情で私を見る。
「私は横浜国大の卒業生で、ここでよく卓球をしていました。懐かしいのでちょっと立ち寄ったのです」
彼女は少しは警戒を解いたようだが、それでも表情は硬い。
私は早々にそこを立ち退いた。

16:00、鎌倉をあとにした。手には駅前で買ったいつもの小判揚げを持っている。
横浜で地下鉄に乗り換えセンター北には17:07に着いた。

今回の旅で私は謙信の関東進出の後を辿っただけでなく、自分の思い出の後も辿ったような気がする。テーマを掲げて旅すると、私は各地をかなり訪ねているので、既に行ったことのある地をも行くことになるからだろう。テーマを掲げた旅の問題点も見た気がする。

思い出は語るものでなく、創るものだ。これは中学からの友であるYが言い、私の思いをも代弁している。今年のひとり旅は、思い出をかなり語っているが、それでも、かなりの思い出を創ったとして、Yには勘弁してもらおう。